島根県松江市 4 小学校における放課後子ども教室の 拠点確保別の活動実態に関する研究

A STUDY ON THE ACTIVITY CONDITIONS OF AFTER SCHOOL BY TYPES OF SERVICE CENTER IN 4 ELEMENTARY SCHOOLS OF MATSUE CITY, SHIMANE PREFECTURE

細田 智久*
Tomohisa HOSODA

The After School makes activities and learning spaces for many students by using school facilities and other public facilities. This study aims to clarify how to use the space and how to support the student at the service rooms by actual survey for 4 elementary schools of Matsue City. The results are as follows.

1. The service center makes by using special subject room, multiple room and exclusive room.
2. The support staff carefully services for small student groups. The half ratio students play the static activities, and another students play the dynamic activities.
3. In case of using large multiple room or exclusive room, students can use to both of static and dynamic activities that encourage by sufficiently furniture. But special room do not have many flexibility in activity and using time.
4. In case of using 3 multiple rooms, students can divide to groups by each activities or grades.

Keywords : After School, Elementary School, Survey of Actual Condition, Making Action Space for Children

放課後子ども教室, 小学校, 実態調査, 子どもの居場所づくり

1-1. 研究の背景と意義

我国では、共働きで子どもを育てる若い夫婦の増加に伴い、児童の放課後や土曜日の過ごし方が問われている。さらに、地域の子どもの見守る力が減少していく中で、より一層放課後や週末の安全で良質な児童の居場所づくりの必要性が高まっている。こうした背景から、文科省は平成19年度から「放課後子ども教室推進事業」を進め、学校の余裕教室等を利用し、親や地域の協力を得て、放課後や週末にスポーツや体験活動を実施している。さらに厚労省の「放課後児童健全育成事業」と一体運用され、総称「放課後子どもプラン」として、放課後の子どもの学習支援、居場所として大きな役割を担っている。しかし、急速な整備による不十分な設備、ハード整備への補助は初年度のみという制度上の問題、準備室の欠如の指摘もある¹⁾。こうした中で、平成21年11月下旬の行政刷新会議によるいわゆる「事業仕分け」の場において、これまでの国からの補助事業から地方自治体による実施の流れも示されたことから、今後は各自治体の工夫によってより魅力的な居場所のあり方が問われてくると考えている。

1-2. 研究の目的

本編は、既存の校舎を使用した放課後子ども教室を実施する松江市の4小学校への実態調査によって、参加児童の点呼などの場所となる拠点を含めた全活動場所の把握とスタッフ支援の状況、児童の活動内容や活動の広がり状況を明らかにすることを目的としている。さらに拠点確保別のメリットとデメリットの整理から、地方都

市で進む学校の耐震改修や統合の機会に合わせて、放課後子ども教室の拠点整備を行う際に留意すべき要点的整理も目的としている。

1-3. 調査対象地域の概要

島根県教育委員会の調査では平成19年度の制度スタート時に島根県では41%の小学校区で放課後子ども教室が開設され^{注1)}、これは同年12月時点の全国平均26%^{注2)}よりも高く、島根県は積極的に取り組みを始めたことが分る。県内の主要な市における21年の校区単位の実施見込みは、松江市(34校区中の21校区)、出雲市(38校区中の17校区)、雲南市(21校区中の21校区)、大田市(22校区中の12校区)、益田市(19校区中の12校区)である^{注1)}。この中で出雲市と益田市は「子ども教室と児童クラブと連携した取組み」、雲南市と大田市は「公民館等、関係機関と連携した取組み」として展開されている。一方で松江市は「学校・保護者と連携した取組み」を特色とし、見学会などを通じて保護者の理解を深めた上で順次開設し、将来的には全小学校区で移動の利便性が高い学校施設を活用した放課後子ども教室の展開を目指している^{注3)}。こうした松江市の整備方法は、保護者の要望や地域環境に根ざし、円滑に開設校を増やしている好例と判断した。実際に平成19年の15校区から、22年では29校区(開設見込み含む)に倍増しており、県内他市ではみられない増加ペースである^{注1)}。さらに、松江市は人口20万人規模で、人口密度においても全国の中で中位グループに位置することから、松江市で得られた知見は多くの地方都市の放課後子ども教室の展開にも有益な情報になると判断した^{注4)}。

* 独立行政法人国立高等専門学校機構
米子工業高等専門学校建築学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Yonago National College of Technology, Dr. Eng.

1-4. 既往研究との関係

斎尾・長谷²⁾は、放課後子ども教室の本格運用前の先進的地域および東京近郊の調査によって、安全安心な居場所づくりの在り方を分析している。松本・中山^{3・4)}は、学童保育と放課後子ども教室の一体化事業の調査を行い、拠点付近での活動の様子を論じている。以上の既存研究と比較して、本研究は、1. 放課後子ども教室（以下、「子ども教室」と略す）が本格運用された後にその実態を調査したこと、2. 地方都市の低層校舎の性格を活かした改修事例を含むこと、3. 拠点だけでなく活動場所の全体を把握して、児童の活動内容の全体像を明らかにしていることの3点を特色としている。

1-5. 研究の構成

4章では、調査対象4校の子ども教室の拠点や利用室の位置と登録人数の概要を整理している。5章では、子ども教室における全体像を把握するため、時間別場所別の活動児童数の割合を分析し、児童の活動場所の選択傾向、性差による活動場所の違い、スタッフの支援方法を考察する。6章では、各活動場所を使った具体的な活動内容を明らかにするため、場所別活動別にみた活動内容の分析図を分析し、拠点室の役割や活動の特色にあった場所の作り方を考察する。7章では、以上の分析結果から、4校の調査結果からではあるが、学校全体の配置の中での拠点室の位置も考慮した上で、拠点室の配置および設置方法別のメリットとデメリットを考察する。最後に8章で結論を述べる。

2. 松江市の放課後子ども教室の整備状況

1) 松江市の整備状況（表1）：松江市教育委員会へのヒアリング調査では平成22年4月時点で松江市内34校中26校で学童保育（児童クラブ）を実施し、20校で子ども教室を実施している。この内で15校は学童保育と子ども教室の両方を実施している。子ども教室の20校の中で11校が学校施設を利用し、その他は公民館等を利用している。また、松江市内の子ども教室の運営主体は公民館で、公民館スタッフが地域の支援スタッフの協力を得て担っている。これは松江市民が町内会費から公民館運営費を拠出している形態に所以する。

表1 松江市内の小学校における学童保育と放課後子ども教室の開設状況と調査4校の位置付け

松江市 小学校 34校	学童保育と放課後子ども 教室の開設状況（H22.4）	子ども教室 の利用施設	子ども教室の拠点別校数
	11校：学童保育（児童クラブ）のみ開設		3校：多目的教室・スペース利用→2校調査
	15校：学童保育と放課後子ども教室の両方を開設	11校：学校利用	2校：公民館を拠点に学校の一部を利用
	5校：放課後子ども教室（子ども広場）のみ開設	9校：公民館など利用	2校：専用室設置→1校調査
	3校：どちらも開設なし		2校：体育館・校庭利用
			1校：特別教室利用→1校調査
			1校：講堂利用

2) 学童保育と放課後子ども教室の相違点：学童保育は、働く親を持つ子どもの放課後及び長期休業中の生活の保障を目的とし、遊びや生活の場を与える有料の公的サービス（月5千円程度）で、松江市では学校内に専用の保育室を持ち、軽食も提供される。一方で、放課後子ども教室は、すべての児童生徒を対象に体験・交流活動の場を提供し、原則無料のサービスである。両方が実施されている松江市内の学校では、子ども教室の参加児童は学童保育室には入れないが、学童保育の参加児童は子ども教室の子どもと利用室などで一緒に活動している。

3. 研究方法

1) ヒアリング調査：H21年度及びH22年度の年度当初に松江市教育委員会へのヒアリング調査を行い、松江市の現在の子どもの教室の整備状況と今後の実施校拡大を目指した取り組みについて聞き取りを行った。

2) 調査対象校の選定：表2に示すように、ヒアリング調査の過程で、学校施設を利用して子ども教室を行う11校の内で円滑に運営され、ハード面で校舎内での拠点室の整備方法が異なる4校を調査対象として選定した。選定は、11校の内ですべて校舎への拠点室の整備のあり方を考察できるように、公民館を拠点とする2校を除き、次に体育館や講堂を拠点室とする3校も宿題支援が十分に行い難い状況にあるため除いた。残る6校の内、施設面で不十分なプレハブ1校と大規模校のために人数制限を実施中で運営上課題のある1校を除く4校とした。

表2 拠点室の設置状況と運営面の課題を考慮した調査対象校の位置付け

子ども教室の拠点別校数	学校名 (下線の学校を調査)	体育館・講堂を除く校舎内に拠点室を設置	運営面の課題(松江市教育委員会ヒアリング結果より)
3校：多目的教室・スペース利用	NO	●	全校児童約1000人で子ども教室は人数制限を実施中
	FU	●(2F多目的)	
	SI	●(1F多目的)	
2校：公民館を拠点に学校の一部を利用	UC	—	
	KO	—	
2校：専用室設置	NA	●(旧幼稚園舎)	
	KA	●(プレハブ)	
2校：体育館・校庭利用	HO	—	拠点室が体育館のため、宿題支援が十分には行い難い
	TA	—	拠点室が体育館のため、宿題支援が十分には行い難い
1校：特別教室利用	TI	●	
1校：講堂利用	OO	—	拠点室が講堂のため、宿題支援が十分には行い難い

3) スタッフヒアリング調査：各校に1名ずつ配置されているコーディネーターと複数配置されている支援スタッフ（いずれも地域住民や児童保護者）にヒアリング調査を行うと共に、拠点や利用室などの撮影を行った。

4) 実態調査：上記で得た資料を基に各室の家具レイアウト図を作成し、H21年6月と9月にNA小学校、6月と10月にTI小、H22年7月にFU小、7月にSI小の4校を対象に2度ずつ^{注5)}調査シートを用いた15分毎の活動内容プロット調査を行った。調査シートには、児童とスタッフの位置と活動内容、使用家具を記入した。

4. 4校における放課後子ども教室の利用室の配置と概要（表3）

1) TI小（図1）は、学校の家庭科室を拠点とし、その周辺の体育館と中庭が良く利用され、校庭も利用している。拠点が家庭科室のため、私物の管理収納スペースを設けることができず、マットを敷いてかばんを置いている。全校児童は362名で子ども教室の登録人数は76名である。月曜と木曜の週2日活動している。拠点の家庭科室の横には学童保育の専用室（登録60名）を持つ。表3に示すスタッフの支援方法では学年の上下関係に捉われず、皆で一緒に遊ぶ雰囲気大切に、スタッフは見守りを中心に支援している。

2) NA小（図2）は、校舎に隣接する旧幼稚園舎を改修した専用

室を拠点とし、校庭、裏山や校舎周辺の水田などを利用している。それ以外にも体育館・図書館を利用できるが、調査時には利用する児童はいなかった。なお、校舎から専用室へは履き替えは必要だが、専用室前の庇が学校昇降口前のバルコニー下まで連続しており、雨に濡れずにアクセスできる。拠点内に収納スペースを確保し教材の管理ができています。全校児童は35名で登録人数は15名である。月曜から金曜の週5日活動している。学童保育は実施していない。支援方法では、学年の上下関係にとらわれず、皆で一緒に遊ぶ雰囲気大切にしており、スタッフは見守りを中心に支援している。

3) F U 小 (図3) は、2階の多目的室を拠点とし、図書室、体育館、中庭、前庭を利用している。多目的室と図書室は隣接している。全校児童は250名で登録人数は47名である。月・金曜の週2日活動している。多目的室下の1階に学童保育の専用室(登録50名)を持つ。支援方法では、家庭的な雰囲気を大切に、スタッフは見守りを中心に支援している。スタッフの一部にサッカーを熱心に指導する人がおり、校庭でサッカーを楽しむ児童が比較的多い。

表3 調査4校の概要整理表

学校名	TI小学校	NA小学校	FU小学校	SI小学校
全校児童数	362名	35名	250名	150名
放課後子ども教室	運営支援 拠点整備方法 スケジュール 登録児童数 スタッフ数 大切にしている雰囲気とスタッフの活動支援における役割概要(スタッフヒアリング結果より) 利用スペース	FI公民館 幼稚園舎を改修して専用室として整備 月曜15:10-17時 火曜15:30-17時 15名 3名程度 学年の上下のつながりを大切に、よく遊ぶ雰囲気を大切に、見守りを中心に支援している。 拠点に1人は配置している。 校庭、校外近郊(体育館、図書室も利用可能)	FI公民館 2階多目的室を活用 月曜15-17時 金曜15-17時 47名 5名程度 家庭的な雰囲気、自由を大切に、見守りを中心に支援している。 拠点に1人は配置している。 図書室、体育館、中庭、前庭	SI公民館 1階の多目的ホールと面廊の多目的室を活用 月曜15:30-16:45 80名 8名程度 自由に活動させ、見守りを中心に支援している。スタッフの一部にサッカーを熱心に指導する人がいる。 拠点に1人は配置している。 多目的室、体育館、校庭
学童保育(児童クラブ)	有り	無し	有り	無し
実態調査日	H21.6.11 H21.10.15	H21.6.4 H21.9.17	H22.7.2 H22.7.9	H22.7.5 H22.7.12

5. 時間別場所別の活動人数の考察

以下では、図1～4の中に示す時間別場所別および男女別の活動児童数とスタッフ数の集計結果を用いて、児童の活動場所の選択傾向、性差による活動場所の違い、スタッフの支援方法を分析する。

5-1. T I 小の活動人数の分析 (図1)

1) 児童数：1日目の調査開始時は拠点の家庭科室での授業が延長していたため、体育館の使用が5割近くを占めていた。途中16時台に家庭科室が使えるようになると徐々に体育館から家庭科室へ移っていった。2日目の調査開始時には学校の取り組みで体育館を使

えなかったため、屋外を使用する人数が最も多かった。1日目と比べ、体育館の人数が減り、屋外の人数が増えていたことから、子ども教室開始時の活動場所がその後の活動場所の選択に影響している事が考えられる。

2) 男子と女子の性差：男子は1日目に体育館の使用が最も多かった。調査開始時は、体育館の使用がほとんどだったが、16時頃から人数が減り、屋外の人数が増えていた。2日目は屋外の使用が大半を占めた。1日目と合わせて、男子は体育館や屋外などの運動できる場所を多く使用していることがわかった。女子は1日目の調査開始時は4つの場所に分散していたが、16:15頃から家庭科室の人数が多くなっていった。2日目の開始時には、使えなかった体育館以外の場所に分散し、15:30に屋外の人数が最も多くなっていった。その後は1日目と同様に、16時頃から家庭科室の人数が多くなっていった。男子に比べて女子は、室内での活動が多い傾向が分った。

3) スタッフ数：1日目は合計して家庭科室内のスタッフ数が最も多かった。この理由は、室内の折り紙などの活動を支援するために多くのスタッフを配置したためである。体育館は児童数に比べてスタッフ数が少なく、体育館は見通しが良いため児童の動きを把握しやすく少ないスタッフでも対応できることがわかった。2日目は屋外のスタッフ数が児童数の傾向と同じく最も多く、広い屋外を多くの人数で見守っていることが分る。中央に位置する中庭にスタッフのいない時間が多かったのは、スタッフの中で中庭は通路的な空間という認識が強いためと考えられる。2日間でスタッフは1人当たり約8人の児童を支援していた。

5-2. N A 小の活動人数の分析 (図2)

1) 児童数：1日目は、はじめ専用室が多く、徐々に屋外の人数が増え、17時以降は専用室のみになり、その後は人数が減り、時間を決め専用室に集まり迎えを待っていることがわかる。2日目は、1日目と比べ外で遊ぶ人数が多くなっていった。これは、子ども教室の時間が短縮したことにより、1日目の調査時には宿題などをしていった児童も遊びを優先するようになったためであると考えられる。

2) 男子と女子の性差：男子は1日目、2日目共に屋外の活動人数が多く、1日目は16:00～16:45、2日目は15:45～16:15まで屋外だけを使っていた。女子の1日目は専用室での活動が多く、2日目は屋外が多かったが、男子と比べて女子は、専用室を多く活用する傾向があった。

3) スタッフ数：児童の傾向と同じく、1日目は16時頃から徐々に屋外のスタッフ数が増え、16:45に最多になっている。スタッフは児童の動きに合わせて動いていることが読み取れる。2日目は屋外に児童がいる時間は2名の内の1名が屋外の見守りを行っている。両日共に専用室に必ず1人はスタッフがあり、拠点内を見守る仕組みだった。2日間でスタッフは1人当たり約3人を支援していた。

5-3. F U 小の活動人数の分析 (図3)

1) 児童数：1日目と2日目共に拠点の多目的室付近の活動が多かった。これは多目的室の床面積が約256㎡と広く、多人数が活動できる広さの余裕があるためである。1日目2日目共に開始直後に多目的室に集まり、その後他の場所で活動し、時間が経つにつれて徐々に多目的室に戻ってきていることが読み取れる。数名ずつではあるが多目的室の隣の図書室の利用も見られた。多目的室が2階にあるため、開始後15分から30分後に中庭や前庭へ活動が広がってい

TI小学校:特別教室を利用するタイプ

家庭科室:調理台で宿題等を実施

<スケジュール>
月曜 15-17時
木曜 16-17時
<登録人数>
76名
<スタッフ数>
6名程度

図1 TI小学校の配置及び放課後子ども教室の概要

NA小学校:専用室を持つタイプ

専用室:入ロスタッフが出入を管理

<スケジュール>
月曜 15:10-17時
火-金曜 15:30-17時
<登録人数>
15名
<スタッフ数>
3名程度

図2 NA小学校の配置及び放課後子ども教室の概要

FU小学校:多目的教室を利用するタイプ

多目的教室:16m四方の広い空間

<スケジュール>
月曜と金曜 15-17時
<登録人数>
47名
<スタッフ数>
5名程度

く様子が把握できた。

2) 男子と女子の性差：男子の1日目の合計人数は多目的室付近が最も多いが、16:30 に地域活動のために体育館が使えなくなるまでは、体育館の活動人数が最も多くなっている。また2日目にはほとんどの男子が体育館で活動している。女子は1日目と2日目共に多目的室付近の活動が最も多く、次に中庭が多かった。体育館は2日目の16:30の3人が最多であった。体育館の活動人数が男子と女子で最も違いが見られた。

3) スタッフ数：1日目と2日目共に拠点の多目的室に最も多くのスタッフがいた。1日目の15:30～16:30まで前庭にスタッフがいないのは、中庭と前庭が行き来しやすくスタッフが見回りながら支援していたためである。2日目は前庭の遊具利用の児童が多いため、スタッフもいた。スタッフ1人当たり約9人を支援していた。

5-4. S I 小の活動人数の分析 (図4)

1) 児童数：SI小では子ども教室終了時に拠点に集合して挨拶を行い、多くがスクールバスに乗るため、16:30の人数は2日目とも拠点のみである。1日目は屋外の活動人数が最も多く、2日目は屋外と体育館が同程度の人数で多く利用されている。一方で、1日目2日目共に拠点・きらきらルーム・いこいルームの活動人数を合わせると全体の4割程度を占め、拠点廻りも良く利用されている。

2) 男子と女子の性差：男子は1日目と2日目共に屋外の活動人数が最も多い。屋外と体育館を合わせると、男子全体の人数の8割程度を占めていることが分かる。女子は1日目と2日目共に、主に低学年が宿題を行ったり玩具なども置いてある「いこいルーム」の活動人数が最も多く、高学年が宿題を行う「きらきらルーム」や図書室も多い。男子と比べ女子は拠点付近を利用していた。

3) スタッフ数：1日目と2日目共に、合計人数では拠点のスタッフ数が最も多かった。2日を通して、高学年が宿題を行う「きらきらルーム」ではスタッフ数が0人で、高学年のためスタッフを配置していない。また、「いこいルーム」も最大1人で、小部屋であるため見守りやすく多くのスタッフを必要としない。学年ごとに分けて利用できる部屋が複数あるとスタッフ人数の配分を考えやすいメリットがある。2日間でスタッフは1人当たり約8人を支援していた。また、「いこいルーム」「きらきらルーム」の児童数を除いた場合は、1人当たり6.6名とより細かく児童を支援できていた。

5-5. 4校の比較考察

- ・児童は、子ども教室の終了時間が近づくにつれて、拠点での活動人数が増えていく傾向が見られた。児童は終了前の集合時間を意識して活動している事がわかった。
- ・児童の活動場所の選択には、開始時間時に使用可能な場所の種類、活動時間の長さ、拠点の広さや学年の高低が関係している。
- ・児童の性差も活動場所の選択に影響を与えており、全般的に男子は体育館や屋外などの運動できる場所を好んで利用し、女子は男子と比べると屋内空間を好んで利用する傾向がある。
- ・スタッフは児童の移動と活動場所の見守りやすさに合わせて、支援人数が増減する傾向が見られた。
- ・スタッフの配置人数は、T I 小は児童約8人に対し1人、N A 小は約3人に対し1人、F U 小は約9人に対し1人、S I 小は約8人に対し1人配置しており、いずれの事例も松江市の支援基準である児童10人に対し1人よりも手厚く配置されていることが分った。

6. 場所別にみた活動内容の考察

以下では図5～8に示す事例別の場所別・活動別にみた活動内容の分析図(調査2日間の合計)を用いて活動内容の詳細を分析する。また、場所の特性と活動内容との関係を捉えるため、調査で見られた多様な活動形態を表4に示すように静的活動と動的活動の2種類に分類した。この2種類の分類は既往研究^{注6)}の分類方法を参考に、宿題や読書などを静的活動、鬼ごっこやボール遊びなどのレクリエーションやスポーツ活動を動的活動として分類を行った。

表4 静的活動と動的活動の分類一覧表

	静的活動	動的活動
注6)での分類	宿題支援や学習	レクリエーションやスポーツ
4校の放課後子ども教室で見られた活動内容	会話	ボール遊び
	宿題	・バスケット ・サッカー
	歌	・ドッジボール
	家具を使用した活動	遊具を使用した遊び
	・お絵かき ・オセロ	・一輪車 ・フラフープ
	・折り紙 ・読書	・なわとび
	・パズル ・ピアノ	設置遊具による遊び
	・積み木 ・コマ	・ブランコ ・鉄棒
	・マット上の手遊び	虫取り、魚取り
		鬼ごっこ

6-1. T I 小の場所別の活動内容分析 (図5)

静的活動と動的活動は4：6の人数比で行われていた。①拠点の家庭科室では、静的活動が主でお絵かき・折り紙・オセロ、机やホワイトボードの家具を使った活動が最も多く、次に宿題をする人数が多かった。②拠点前の廊下では、スタッフや児童の通行やその際の会話が多く見られた。特に調査1日目は開始時に家庭科室が使えなかったため、廊下に長机を設置し、宿題をする様子が見られた。特別教室を拠点する際には、その室が利用できないときに備えて補助的な室を事前に計画する必要がある。③中庭では、多様な活動が行われ、特に友人同士で話す児童が最も多かった。土管やタイヤの山などが、数人単位の児童の居場所を作り出すことで、会話の生まれやすい環境を作り出している。④体育館では、バスケットなどのボール遊びが多かった。体育館の外側にボールなどの遊具を入れることのできる専用のベンチをこども教室開設時に設けており、この工夫が生かされている。⑤屋外では、サッカーをしている人数が多かった。これは全ての場所の中で最も参加人数の多い活動であった。

6-2. N A 小の場所別の活動内容分析 (図6)

静的活動と動的活動は5：5の人数比で行われていた。①専用室では、お絵かき、読書、パズル、宿題などを行う人数が多かった。さらに、専用室内で鬼ごっこをする様子もあり、専用室では静的活動だけでなく、学校側に気兼ねなく動的活動もしやすい自由な雰囲気がある事がわかった。また、専用室前にデッキ部分が整備されているため、靴を脱がずに内部の人と会話がしやすく、専用室入り口付近で話をする児童が多かった。②屋外(専用室近く)には、ピオトープがあるが、プロット調査時はあまり使われていなかった。しかし、事前に訪問した際にはピオトープで多くの児童が虫取りをしていたことから、時期や生物の状態によっては遊び場になっている。③校庭及びその他屋外では、ブランコや滑り台などの遊具を用いて遊ぶ人数が多かった。その他に学校の敷地外に出て水路や川で虫取りなどをして遊ぶ人数が多かった。周囲に豊かな自然環境があるメリットが生かされている。

6-3. F U小の場所別の活動内容分析（図7）

静的活動と動的活動は5：5の人数比で行われていた。①多目的室は約4教室分の広さを持つため、家具を使用して大きく広がる活動が多く、長机を自由に動かしておりがみやお店ごっこを多く行っていた。静的活動だけでなく、なわとびやボール遊びなどの動的活動も行っていた。②図書室は多目的室と隣接し、読書を行う児童が

見られた。③体育館では、ドッジボールなどのボール遊びが最も多かった。これは全ての場所の中で最も参加人数の多い活動であった。④中庭では、一輪車などの遊びが多く、スロープの手すりや、体育館前の柱が役立っていた。⑤前庭では、設置遊具で遊ぶ児童が多くみられた。中庭とつながっているため一体的に利用でき、一輪車で行き来しながら遊ぶ児童も多い。

活動 場所	あ)家具を使用した活動(静的) ・読書・ピアノ ・おりがみ グループ数:41 人数:114 平均人数:2.8	い)宿題 (静的) グループ数:27 人数:70 平均人数:2.6	う)会話 (静的) グループ数:23 人数:74 平均人数:3.2	え)ボール遊び (動的) グループ数:31 人数:136 平均人数:4.4	お)遊具を使用した遊び(動的) ・一輪車・フラフープ ・なわとび グループ数:30 人数:74 平均人数:2.5	か)設置遊具による遊び(動的) ・ブランコ ・鉄棒 グループ数:10 人数:28 平均人数:2.8	き)虫取り (動的) グループ数:4 人数:8 平均人数:2.0
①多目的室 グループ数:125 人数:247 平均人数:2.0	グループ数:33 人数:102, 平均人数:3.1	グループ数:27 人数:70, 平均人数:2.6	グループ数:14 人数:42, 平均人数:3.0	グループ数:2 人数:3, 平均人数:1.5	グループ数:7 人数:30, 平均人数:4.3	多目的室でなわとびの綱を利用して入口をまたぎ綱引きを行う様子	
②図書室 グループ数:8 人数:12 平均人数:1.5	グループ数:8 人数:12, 平均人数:1.5						
③体育館 グループ数:31 人数:139 平均人数:4.5	多目的室内の可動の長机を利用したお店ごっこの様子	グループ数:2 人数:6, 平均人数:3.0	グループ数:29 人数:133, 平均人数:4.6				
④中庭 グループ数:26 人数:59 平均人数:2.3		グループ数:6 人数:24, 平均人数:4.0		グループ数:20 人数:35, 平均人数:1.8	インターロッキングで舗装された中庭では一輪車などの遊びが活発に行われている		
⑤前庭 グループ数:18 人数:47 平均人数:2.6	前庭では設置遊具で活発に遊ぶ児童の安全をスタッフが見守る	グループ数:1 人数:2, 平均人数:2.0	グループ数:29 人数:133, 平均人数:4.6	グループ数:3 人数:9, 平均人数:3.0	グループ数:10 人数:28, 平均人数:2.8	グループ数:4 人数:8, 平均人数:2.0	

図7 F U 小学校の場所別・活動別にみた活動内容の分析図 (2日分の集計) 図中の「平均人数」は「人数/グループ数」を示す。

活動 場所	あ)家具を使用した活動(静的) ・積み木・コマ ・マット上の手遊び グループ数:29 人数:84 平均人数:2.9	い)宿題 (静的) グループ数:19 人数:55 平均人数:2.9	う)会話 (静的) グループ数:16 人数:48 平均人数:3.0	え)ボール遊び (動的) グループ数:58 人数:266 平均人数:4.6	お)設置遊具による遊び(動的) ・ブランコ ・鉄棒 グループ数:19 人数:60 平均人数:3.2	か)遊具を使用した遊び(動的) ・一輪車・フラフープ ・なわとび グループ数:9 人数:38 平均人数:4.2	き)虫取り (動的) グループ数:1 人数:1 平均人数:1.0
①のびのび ホール グループ数:26 人数:73 平均人数:2.8	グループ数:13 人数:31, 平均人数:2.4	グループ数:7 人数:24, 平均人数:3.4	グループ数:5 人数:12, 平均人数:2.4		グループ数:1 人数:6, 平均人数:6.0	グループ数:4 人数:8, 平均人数:2.0	
②いこい ルーム グループ数:35 人数:101 平均人数:2.9	グループ数:15 人数:51, 平均人数:3.4	グループ数:16 人数:40, 平均人数:2.5	グループ数:4 人数:10, 平均人数:2.5	のびのびホールでは、こども教室開始時に児童毎に名札を配布し安全管理に配慮している。		きらきらルームは、高学年の宿題スペースとして、椅子座の落ち着いた雰囲気を持つ。	
③きらきら ルーム グループ数:6 人数:24 平均人数:4.0	グループ数:1 人数:2, 平均人数:2.0	グループ数:3 人数:5, 平均人数:5.0	グループ数:2 人数:7, 平均人数:3.5				
④体育館 グループ数:50 人数:154 平均人数:3.1	いこいルームは、低学年用の宿題スペースとして、床座の賑やかな雰囲気を持つ。	グループ数:3 人数:7, 平均人数:2.3	グループ数:39 人数:115, 平均人数:2.9	グループ数:8 人数:32, 平均人数:4.0			
⑤屋外 グループ数:34 人数:200 平均人数:5.9			グループ数:14 人数:139, 平均人数:9.9	グループ数:19 人数:60, 平均人数:3.2	グループ数:1 人数:1, 平均人数:1.0		

図8 S I 小学校の場所別・活動別にみた活動内容の分析図 (2日分の集計) 図中の「平均人数」は「人数/グループ数」を示す。

6-4. S I 小の場所別の活動内容分析（図8）

静的活動と動的活動は3：7の人数比だった。他の学校に比べて動的活動の割合が高いのは、体育館や屋外でのボール遊びが非常に活発に行われていたからである。①拠点となる「のびのびホール」では、マットを用いた遊びの人数が最も多かった。会話の人数も最も多く、児童同士やスタッフとの交流の場となっていることがわかる。静的活動だけでなく、卓球などの動的活動も盛んであった。②いこいルームは、床仕上げがカーペットで床座になれるため、低学年の宿題と共に、積み木やコマなどで遊ぶ人数が最も多く見られた。③きらきらルームは、長机と椅子のスクール形式の家具配置であるため、主に高学年が宿題を静かな空間で取り組んでいた。このように拠点と両隣の3室は活動種類や高低の学年別に使い分けられている。④体育館では、ドッジボールなどのボール遊びが多く、グループ数で最多の活動であった。⑤屋外では、サッカーが最も多く、児童数で最多の活動であった。

6-5. 4校の比較考察

・NA小、FU小、SI小の拠点では、静的活動と動的活動の両方が行われていた。しかし、特別教室を拠点とするTI小は固定家具のため動的は行われていなかった。学校の一室を拠点にする場合は、固定家具のない多目的室の方が児童は自由な活動を行っていた。

・静的と動的の人数比は2日間の合計で、静的が最少のSI小で3：7、TI小が4：6、静的が最多のNA小とFU小で5：5であった。SI小で動的に偏ったのは、校庭のサッカーと拠点での動的が多かったためである。4例はいずれも宿題支援だけでなく、NA小での田んぼの虫取りやSI小の卓球やサッカーなど、スタッフの協力を得た自由な活動を行えていることが分った。

・図5から図8の図中に示すグループ平均人数から、静的活動の宿題は2.0人から5.0人で、宿題を1人で行うことは少なく、拠点室もしくはその周辺の室を利用しながら複数人のグループ単位で行うことが分った。拠点室は宿題支援を想定して、複数人で学習できるコーナーや家具を用意する必要がある。

・学校毎のグループ数と人数が多い場所・活動では、TI小とSI小が体育館や校庭でのボール遊び、NA小が拠点室での会話や校庭での鬼ごっこ、FU小が体育館でのボール遊びと多目的室での家具を使用した活動であった。これらの内で、ボール遊びはグループ平均人数も5人以上の場合が多く、子ども教室が学校の体育館や校庭を活用することで、多人数が交流し活動する機会を作り出しており、学校施設を活用した子ども教室のメリットの1つと言える。

・会話は拠点室以外でも中庭で良く見られた。中庭を持つのはTI小とFU小で、TI小では中庭の築山と体育館の外側で中庭に面した部分のベンチ、FU小ではベンチで会話するグループが多く、次の活動場所への移動時の小休憩などに有効に活用されている。

7. 拠点室の配置および設置方法別のメリット・デメリットについての考察（図9）

以下では、これまでの分析結果から明らかにした内容を集約し、子ども教室の児童の管理や静的活動などの拠点として重要な場所である拠点室の配置および設置方法の違いによって児童の活動にどのような影響が及んでいるかを考察する。

1）TI小にみられる特別教室を拠点とする場合（図9①） 家庭

科室を拠点とするTI小は、拠点が中庭・体育館等と近いためこれらの場所をスムーズに活用できていた（4、5-1より）。しかし、拠点での授業が長引くと点呼場所や私物の保管場所を失うことがある（6-1より）。補助的な代替拠点の想定が必要と思われる。また、特別教室であるため、すでに多くの実習教材が収納してあり、子ども教室の教材や活動遊具などの収納スペースの確保が難しいデメリットもあった（4より）。

2）NA小にみられる別棟の専用室を拠点とする場合（図9②） 専用室を持つNA小は、授業の影響を受けず活動でき（6-2より）、収納スペースも十分確保できていた（4より）。さらに、屋外へのアクセスの容易さもメリットである（5-2より）。参加児童数が最大11名と小規模で、専用室で静的と動的の両方の活動が可能であったためもあるが、利用可能な校舎内の図書室や体育館での活動は、ヒアリング調査時および実態調査時共に無かった。

3）FU小にみられる2F多目的教室を拠点とする場合（図9③）校舎2階の多目的室を拠点とするFU小は、約4教室分（16m四方、約256㎡）の広さから、静的と動的の両方を行えている（6-3より）。また多目的室は図書室と隣接していることから、子ども教室時にも図書が利用しやすいメリットがある（5-3より）。デメリットは、拠点が2階で外に出るのに時間がかかり、中庭などがベランダ越しに見えても屋内と屋外のつながりが良くない点が挙げられる。また、中庭型校舎で子ども教室を運営するメリットとして、中庭・前庭・体育館の行き来がし易く、特に中庭はスタッフの目が行き届き易い（5-3より）。中庭は活動場所への移動時の小休憩スペースとなり、児童間の会話を生み出し易い（6-5より）。

4）SI小にみられる複数の多目的のスペースを拠点とする場合（図9④） オープンな多目的ホールを拠点とし、両脇の2室も利用できるSI小は、学年別や活動別に使用室を区分し、高学年の宿題、低学年の宿題、動的活動に使い分けできる大きなメリットを持つことが把握できた（6-4より）。これはスタッフ配置にも影響してお

図9 拠点室の配置および設置方法別の分析図

※図中の[]内の数字は、本文中の考察箇所を示す。

り、高学年の宿題に使用する室では、自分たちのペースで学習させて見守りのスタッフは配置せず、屋外での動的活動などにスタッフを多く配置するなど、効率的なスタッフ配置も可能にしていた（5～4より）。一方で、デメリットとまでは言えないが、学年別や活動別に使用する室を区分しすぎる場合があるとすれば、異学年間や活動グループ間での多様な交流を妨げてしまうことも考えられる。

8. 結論

・拠点の設置方法が異なる4校の活動場所やスタッフの支援の実態を明らかにできた。①児童の活動場所の選択には、開始時に使用可能な場所の種類、活動時間の長さ、拠点の広さや学年の高低が関係している。また、児童の活動種類や活動場所の選択には、性差も大きく影響し、男子は屋外や動的を好み、女子は拠点での宿題や家具・道具を利用する活動が多い。②スタッフの支援では、いずれもスタッフ1人当たり児童3～9名程度の少人数で支援しており、静的活動と動的活動の人数比は3：7から5：5で、スタッフによって安全が確保された遊びと学習の両面の時間と場所を提供していることが分った。空間の広さによる見通しの良さを利用したり、支援の手間が少ない高学年の活動拠点を明確にすることで、低中学年へのスタッフの見守り易さは向上する。

・子ども教室における活動場所と活動内容との関係を考察した。①宿題は、拠点室もしくはその周辺の室を利用した2～5人の複数人のグループ単位で行うことが分った。拠点室の整備時には、宿題支援を想定した複数人で学習できるコーナーや家具を用意する必要がある。②体育館や校庭でのボール遊びはグループ平均人数が5人以上の場合が多く、多人数が交流し活動する機会を作り出している。これは学校施設を活用して子ども教室を開設する場合の大きなメリットであると言える。③中庭型校舎のTI小とFU小では、児童間の会話が拠点室だけでなく中庭でも多く見られた。築山やベンチで会話するグループが多く、次の活動場所への移動時の小休憩にも活用されている。放課後の子ども教室において中庭空間が果たす役割を明らかにできた。

・拠点の設置方法別のメリットとデメリットを考察し、この結果から、以下に今後の拠点整備の際に留意すべき要点を挙げる。事例毎に長所短所はあるが今後の校舎の整備や改修の際には子ども教室の開設を見越し、①児童が静的と動的の両方の活動ができる場を用意する必要がある。静的と動的の両方に対応した床仕上げ、かばん等の私物や教材の収納等、実際の運用を想定した計画が求められる。②拠点室は点呼・保護者の引き取りの際の集合場所であると共に宿題支援・会話・家具を使用した活動も行える空間として、屋外からアクセスし易く、十分な広さを持つ室として整備することが求められる。図書室や屋外スペースとつながりの良い場所に配置すれば多様な活動に対応できる。また、登録児童数にもよるが、③子ども教室が、学校の授業・行事や地域開放などに対し優先的に拠点として利用できる室・スペースを確保できれば、授業などの延長で拠点を利用できなくなる等の問題を防ぐことができる。さらに、そのような拠点室を複数確保できれば、学年の高低別や活動内容別の使い分けも可能になる。特に、特別教室や体育館を拠点室として利用する場合は地域利用の影響を受け易いため、多目的室の拠点室への利用や拠点専用室の整備が望まれる。

謝辞

本調査分析は、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（B）「実態調査に基づいた地域が協力し易く安全も確保した放課後子ども教室の空間モデル構築（平成21～23年度、若手研究B：21760468）」の一環として実施した。

この調査および集計に関しては、安川大地氏（米子高専専攻科建築学専攻修士）から多大な協力を得た。また松江市教育委員会、公民館職員、調査校の教職員や子ども教室支援スタッフの方々にも心良く調査にご協力いただいたことを記し、謝意を表したい。

参考文献

- 1) 全国学童保育連絡協議会：よくわかる放課後子どもプラン，ぎょうせい，2007.4
- 2) 斎尾直子，長谷夏哉：都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-豊かな空間確保両立についての考察 -こども達の放課後の居場所づくりに関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.614，pp.33～39，2007.4
- 3) 松本歩子，中山徹：「放課後子どもプラン」実施における学童保育のあり方に関する研究 -一体化事業における保育機能の現状から-，日本建築学会計画系論文集，No.635，pp.33～40，2009.1
- 4) 松本歩子，中山徹：学童保育と全児童対策事業の連携のあり方に関する研究 -「放課後子どもプラン」における学童保育の現状 その2-，日本建築学会計画系論文集，No.655，pp.2115～2124，2010.9

注

注1) 島根県教育委員会：放課後子ども教室および放課後児童クラブ 市町村別実施状況，2010.3

（<http://www.pref.shimane.lg.jp/life/kyoiku/syougai/plan/index.data/21kyousitu.kurabu.pdf>）

この中で平成19年の島根県内全小学校区数に占める開設小学校区数の割合は41.6%である。この他に平成19年から22年の市町村別のデータを掲載している。

注2) 文部科学省・厚生労働省放課後子どもプラン連携推進室：放課後子どもプラン実施状況調査について，2007.12

（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061901.htm）

（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061901/001.pdf）

この資料中の7頁に放課後子ども教室が未実施なのは、21,874小学校区中で16,167小学校区（73.9%）であることが示されている。

注3) 島根県教育委員会・島根県健康福祉部編：平成21年度しまねの放課後子どもプラン連携事例集，2010.4

（<http://www.pref.shimane.lg.jp/life/kyoiku/syougai/plan/index.data/21jirei.pdf>）

この中で連携先の種類別に、各市町の取組みが5つに分類されている。

注4) 総務省統計局：統計でみる市区町村のすがた2011

（<http://www.stat.go.jp/data/ssds/5b.htm>）

この中の「人口・世帯」データ内で松江市は人口19万6千人で全785市の116位である。この人口と「自然環境」データ内の総面積とで計算した人口密度では、松江市は370（人／平方キロ）で422位である。

注5) 平成21年度に調査したTI小とNA小では、事前のスタッフのヒアリング調査において、学期始めは児童が不安定であるため、1ヶ月程度経た後に調査を行った方が児童の自然な活動が把握できるとのアドバイスをもらい、1学期と2学期のようすの違いも考慮して調査を実施した。一方でTI小とNA小共に1度目と2度目の調査間で使用する活動場所に違いは無く、活動人数に違いを及ぼした原因は室が学校授業によって使用できなかったことと開始や終了時刻の変化によるものであると判断できたため、FU小とSI小では1学期の間に2度の調査を実施した。

注6) 渡邊昭彦，細田智久：アフタースクールの利用諸室における児童への学習支援の実態分析—学校問題に対応するフルサービススクール等の米・英実態調査研究 その2—，日本建築学会計画系論文集，No.617，pp.31～38，2007.7 の中で、宿題支援や英語、芸術や音楽学習等を静的活動、レクリエーションやスポーツ等を動的活動と定義している。

（2011年6月3日原稿受理，2011年12月16日採用決定）